

いちかわ 定点観測

昭和45年

商店街の通りは八幡小学校への通学路で、子どもの数も多かった。



八幡一番街

人であふれた昭和40年代、
ここが流行の発信源だった

JR本八幡駅北口から東に入るとすぐ八幡一番街。戦後、排水溝の上に板を渡して何軒か店を出したのが始まりだ。通称「ドブ板通り」と呼ばれた時代を、川上園茶舗の川上義雄さんは懐かしそうに振り返る。「うちが開店した昭和35〜36年頃は、ドブ板の上にならずらりと飲み屋が並んで、小さい店でもずいぶん流行ってたよ。その頃は、お茶もよく売れた（笑）」。寒い日は通りに一斗缶を出してたき火をすると、ご近所さんが寄ってくる。何ともおおらかで、生活感にあふれていた。

昭和40年代、「通りが人で埋まって、奥まで見通せないほどだった」と語るのは青果店みやぎ屋商店の田口雅章さん。「うちの2階がサイゼリヤの1号店で、階段の下まで行列ができてたっけ。とんかつ、塩ラーメン、高

平成17年

30年以上続く店に常連さんが足繁く通う。街並みは明るく清潔に。



級クラブと、何でも一番街が(市内で)最初だった」。

土谷不動産の2代目社長・土谷幸司さんは、昭和45年頃は写真の女の子と同じくらいの小学生。「ほとんどの店が自宅兼店舗だったから、自分も店の玄関から出入りしたし、居間にいればお客さんの声が聞こえてきた。そうやって大人に接しているから、商店の子は大人になるのも早いんだよね」。その後、昭和40年代後半にかけて南口に長崎屋、西友、高架下にシャポーなどが開業。これを機に、人の流れが大きく変わっていく。

お店の個性を楽しみながら きれいな歩道をゆつくり歩く

昔に比べれば人通りは少なくなりましたが、現在の八幡一番街にはおしゃやかなレストランなども増えている。「朝晩のゴミ収集。駐車場や自転車駐輪場、それにホームページも作ったし、この4〜5年で商店街はずいぶん良くなったと思うよ」と、商店会長のグレン・ド・ポータ(ブティック)田村和一さんの表情は明るい。そして昔も今も、八幡一番街で交わされる言葉はよそ行きではなく、人懐っこくて温かだ。